真田宝物館だより

第47号

六連銭

令和4年12月発行

真田宝物館の推し活

コレがいちおし

割羽織（わりばおり）

前身丈101.0　身幅63.5　袖丈52.0　袖幅32.0

割羽織は、背中の縫い目の下半分を縫い合わさずに裂けた状態の羽織で、動きやすいため、馬に乗るときや旅行などで使われたといわれます。この割羽織は使用者・時代ともに不明ですが、木綿地でより実用性があるといえるでしょう。

そして、なんといってもこの柄。真田家の三つの家紋、六連銭・結雁金・洲浜をデザインし、色は抑え目なのにド派手で強烈な印象を受けます。江戸時代の真田家の殿様が、こんな羽織を着て、馬に乗っていたかもしれないなんて！！現代の私たちが見ても、びっくりするようなこのデザインに心強くひかれます。それと同時に、どんな人物がデザインしたのか、どこで作られたものなのか、当時の人はこのデザインをどう感じたのか、知ることはなかなか難しいですが、あれこれと想像してみるのも楽しいところです。

古さを感じさせないこのデザイン、"スキ"が高じて館内の案内表示やグッズなどにもここからパターンを起こして使っています。

（山中）

コレがいちおし

源氏かるた　1枚7.8×5.4　全108枚

現在、かるたと言えば何を思い浮かべますか？子どもの遊びではことわざを題材にした「いろはかるた」や、群馬県の「上毛かるた」など、地域でつくられる郷土かるた・ご当地かるたなどがありますね。競技かるたで使われるのは「小倉百人一首かるた」で、最も一般的なかるたといえるでしょう。

このかるたは、源氏物語を題材にしたかるたです。源氏物語は全54帖の中に、800首近い和歌が織り込まれていますが、その中から1帖につき1首を選び出してかるたにしています。和歌の上の句は文字札、下の句は絵札で、文字と絵の面は絹地を使い、金銀が散らされた豪華なつくりです。使っていた人物は不明ですが、大名やその子女にとって源氏物語を学ぶことは高い教養を身に着けるという意味で必要不可欠でしたから、藩主本人のもの、あるいは嫁入り道具として持ち込まれたものかもしれません。

絵は書かれた句やその帖にちなんだもので、かるたという性格からか、しっかり描きこまれたというよりは、素朴でとてもかわいらしい雰囲気があります。美しい光源氏を中心に繰り広げられる愛憎渦巻く壮大な物語にしては、なんとなくほのぼの、のんびりとしたところになんともいえない魅力を感じます。源氏物語の和歌はなじみのないものではありますが、このかわいらしい絵とともに味わってみたいと思わせてくれます。　（山中）

真田宝物館の推し活、いかがでしたか？職員それぞれの資料に対する意識やダイスキポイントの違いもみえたようです。博物館や美術館で収蔵・展示する資料や作品は、展示のテーマに沿って構成されることがほとんどで、いわば「見方の手順」を示します。でも、そうしたテーマをあえて気にせず「個」としての資料・作品そのものをじっくり見ていただき、歴史的・対外的な評価や価値付けだけでなく、ご覧になったひとりひとりの感性で「これが好き」「なんとなくおもしろい」と思っていただくきっかけになったらうれしいです。

（文責　山中さゆり）

〒381-1231 長野市松代町松代4-1
TEL 026-278-2801　FAX 026-278-2847
https://www.sanadahoumotsukan.com/

長野市教育委員会 松代文化施設等管理事務所

（真田宝物館・真田邸・文武学校・旧横田家住宅・象山記念館・旧白井家表門・松代城跡・山寺常山邸・旧樋口家住宅・旧前島家住宅・旧松代藩鐘楼・寺町商家）

真田宝物館の推し活

推し活―自分の好きなイチオシの人や物事などに情熱を注いで様々な形で応援する活動―

真田宝物館では、真田家伝来の資料を約５万点以上、松代藩や松代藩士に関する寄贈・寄託資料も１万点以上収蔵しています。学芸職員はこの資料を整理し、調査・研究してわかったことをもとに展示したり、論文を書いたりします。こうした日々の活動のなかで「この資料がダイスキ！」「この資料はとてもオモシロイ！」と思うものがたくさんあります。

今回は、そんなイチオシの資料の素晴らしさを、職員それぞれの熱い推しコメントとともにご紹介します。

コレがいちおし

桔梗形茶碗　口径10.2×高5.8×高台径6.1

松代焼は、江戸時代松代藩による殖産興業政策のひとつとして始められ、松代周辺の複数の窯で焼かれたやきものです。のちに民間の経営へと移り変わり、徳利・かめ・すり鉢など、人々の生活に根差した日用雑器がたくさんつくられました。素朴ながらも味わい深く、力強く重厚なつくりが特徴です。そしてなんといっても松代周辺の土に含まれる鉄分と釉薬とが反応して生まれる青緑色の発色がとても美しい！芸術品と呼んでも申し分ないかもしれません。

真田家に伝来する松代焼は4点ほど。その中でもこの桔梗形茶碗は、がっちりとしたつくりの松代焼には珍しく軽く極々薄手に仕上げ、口縁部分は桔梗の花びらの形に整えるなど、繊細で上品なつくりとなっています。小ぶりなお茶碗ですが、存在感はピカイチ！かたちの上品さと美しい色に注目です。　（小山）

コレがいちおし

盃　大石内蔵助自画讃　径8.4　高3.2

この盃、何の絵柄かわかりますか？愛嬌ある表情の武士、実は赤穂事件で有名な大石内蔵助の姿です。

赤穂大石神社宝物殿に収蔵される大石内蔵助自作の「掟の盃（遊春盃）」と同様の絵柄で、多く出回っていたもののうちの一つとみられます。仇討ちを心に秘めながらも、それを欺くために遊里通いを繰り返していた内蔵助の姿と言われていますが、それ以上に注目していただきたいのが後ろに描かれた高札。なんとここには酒を飲む上で気をつけるべき五つの掟が書かれているのです。いったいどんなことが書かれているのか、見てみましょう。

定

一　喧嘩口論之事
（喧嘩や口論をしてはならない）
一　下ニ置べからず
（注がれた盃は飲み干すまで下に置いてはいけない）
一　於（お）さへ申間敷（まじきこと）事
（無理に酒を勧めてはならない）
尤（もっとも）、相手によるべし（但し、相手による）
一　志（し）たむ事無用
（ぼとぼとと酒をこぼしてはならない）
一　すけ申間敷（まじきこと）事
（人の酒まで助けて飲んではならない）
但し、女中ハくるしからず
（但し、飲めなくて困っている女性は助けてあげよう）

無理に酒を勧めてはいけないが、相手による。人の酒まで助けて飲んではならないが、飲めなくて困っている女性は助けてあげても良いなどと、何とも粋な内容が書かれ、くすりと笑いと共感を誘います。

江戸時代も現在も、酒席でのマナーは共通のようですね。　（溝辺）

コレがいちおし

鍾馗図　三村晴山筆　350.0×267.0

真田宝物館で収蔵する大名道具は、形も大きさも様々、多種多様です。

あまりの大きさに、展示するにはとても大変！そもそも展示ケースに入らない？でも、皆さんにぜひ見ていただきたい！（私も見たい！）―この鍾馗図も、そんな資料のうちの１点です。

その大きさや迫力もさることながら、注目していただきたいのは、この絵を描いた絵師の画力です。すばやい筆運びで一気呵成に描いたところもあれば、顔の表情や手の筋肉などには非常に細かな描写が見られます。

この鍾馗図を描いたのは、松代藩の絵師・三村晴山（1800～1858）です。晴山は木挽町狩野家の狩野晴川院の門に入り、松代藩だけでなく晴川院らと共に幕府の御用もつとめていました。晴山の作品は御殿の障壁画、掛軸、屏風、絵巻、肖像画など、実に多岐にわたります。

ただ、この鍾馗図、誰が何の目的で作ったのか（まさか端午の節句の幟？！）、そしてこれだけ大きな旗、一体どこで使われたものなのか…ナゾです。　（米澤）

コレがいちおし

便筒（べんづつ）　6.3～7.8×29～46.7

尾籠な推しですみません。これは、殿様が使った、いや使う予定だった携帯便器です。大ではなく、小便用です。用途は、例えば将軍や宮中へのあいさつなどフォーマルな勤務の時や、将軍が能や相撲などを見物する際のお供、鷹狩や旅行など途中退席が難しい場合に使用しました。大きさは長さが30㎝程度で、表面と内側に防水仕様の漆を塗ったものが標準のようですが、写真左、茶色のものは柿渋が塗られています。それぞれ開口部にはあたりを和らげるため絹が、上等なものは綿入りの絹が巻かれています。左から３番目と４番目のものは二つ折りで、多い時や長時間用と思われます。生理現象はたとえ大名でも避けることはできなかったというわけです。いざという時に藩主を助ける大切で頼もしい助っ人ですが、展示されることはほぼありません。でも、大名の日々の生活や仕事を考える時、人間らしさが最もうかがえる資料だと思います。実は、このほかにも藩主が携帯したおまる（お丸・お虎子）も収蔵しています。　（降幡）